



異質な要素の調和

三重大学 生物資源学研究所 田中 晶善

本誌第5号の巻頭言は、当年の熱測定討論会の実行委員長が書くのが近年の通例とのことであるので、討論会のお世話をして感じたことを記したい。

討論会の準備をして改めて感じたことの一つは、熱測定学会のカバーする領域の広さである。そのことは、共催学会や後援学会が多数かつ多彩であることが象徴している(討論会開催の予告原稿を書く際に念のため事実を確認したほどである)。これらの共催・後援学会名を見て、主催の学会名を当てる「逆引き」はおそらく不可能だろう。今回の討論会でも、通常通りのミクロの話題がある一方で地球規模の話題があり、原理的な話題から実用レベルの話題までであった。

しかし、では熱測定討論会の内容が散漫かと言われるとそうではない。他の学会では、会場が一つ違うと内容が理解できないことが多いと言うより、対象や術語が共通であったり似たりしているにもかかわらず、趣旨も手法も違いすぎるために、違和感と散漫な印象を受けることがしばしばある。他方、熱測定討論会での各発表の分野や内容は多彩であり、自分の専門分野を除けば理解がむずかしいことは同様だが、馴染みがある感じがある。異分野の発表の図表にしても、どこか見慣れた印象があり、質問をする気にもなる。このことは、熱測定学会には熱測定や熱力学という一貫した手法と理論があって、その太い幹の周りに枝葉が豊かに伸び繁っているからであろう。立ち帰ることのできる太い幹を共通に持っている強みであり、細分化が当たり前となっている自然科学にあっては、これだけの分野をカバーして発散しないのは「きわめてユニークな学会」(討論会HPより)というべきである。つい先頃、日本学術会議が文科省に対して「現代科学の理解のためには [中略] 新たな視点で現代科学を全体として理解することが必要」と(教養教育に関連して)答申しているが、熱測定はそのモデルケースとして適しているのではないかと思われる。

マルタとマリアという姉妹の話が聖書にある。イエスの接待に忙しく立ち回っているマルタが、イエスの話を聞けばかりで姉を手伝おうとしない妹のマリアに腹を立て、「私

を手伝うようマリアに言ってほしい」とイエスに苦情を言ったが、しかしイエスはマルタに対して、「あなたは色々なことに気を遣いすぎているがマリアは大事な一事を選んだのだ」と言ってマリアをかばった、という話である。



討論会の実行委員会はマルタ役であるから、マルタに同情したくなる。会場の設定、宿泊や交通の情報提供、参加者数、開催費収支、天候などは大きな関心事である。討論会の前にはこれらのことが脳裏を離れず、学会会長には参加者減の心配をお伝えしたことがあった。それに対する会長の意見は次のようなものであった。参加者減であれば、その分、充実した討論を、と。マリアの選んだ「大事な一事」を忘れるなどの直球が返ってきたわけであり、「いろいろなことに気を遣い」つつあった時にハッとさせられた瞬間であった。もちろん討論会では、下部構造を担当するマルタと上部構造を担当するマリアの間に争いはなく、両者が調和して盛会となったのである。

ちなみに、熱測定学会の事実上の年会在、単なる年会ではなくあえて討論会と名付けられている経緯については承知していないが、どこか青臭さの残る「討論会」という名称を残していることは、学会の存在意義の「大事な一事」が何であるかを端的に示しており、この学会の特徴であり魅力の一つであるというべきであろう。

討論会の会場付近では、「熱測定討論会」の看板や「熱測定学会」の文字を見て不思議そうな顔をする学生の姿が見られた。熱測定という言葉は、日常用語のようでもあり学術用語のようでもあり、不思議な印象を与えるようである。このことは、実用的な要請から出発して宇宙の運命まで言及するようになった熱力学の由来や、熱測定の原理的な単純さとその応用の多彩さとも無関係ではなさそうである。相反しがちな二つの要素が学会においてうまく調和していること。このことが、熱心な討論会とあいまって、他の学会にはない魅力を熱測定学会に与えている。